

2020/09/27

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑱

『恐れの仕事』 ヨハネ 6:16-33

✠ 主は信仰を試す

「夕方になって、弟子たちは湖畔に降りて行った。そして、舟に乗り込み、カペナウムのほうへ湖を渡っていた。すでに暗くなっていたが、イエスはまだ彼らのところに来ておられなかった。」(ヨハネ 6:16-17)

5つのパンと2匹の魚によって5000人の人たちが満たされるという奇跡の後、弟子たちはイエス様とは別行動で、舟でカペナウムに向かいました。イエス様は、あえて一緒に行動しないことで、弟子たちの信仰を試されました。神が信仰を試すのは、私たちの信仰を増し加えるためです。祈ってもきかれないことがあるのは、私たちの信仰を増し加えるために、神が静観なさっているからです。それは、信仰にこそ問題の解決があるからです。

「湖は吹きまくる強風に荒れ始めた。こうして、四、五キロメートルほどこぎ出したころ、彼らは、イエスが湖の上を歩いて舟に近づいて来られるのを見て、恐れた。」(ヨハネ 6:18-19)

穏やかだった生活に突然困難が襲ってきたようなものです。これは夜中の出来事であって、暗闇と強風で、弟子たちの心の中は、「このまま死ぬのではないだろうか」という恐れでいっぱいです。イエス様は、この恐れを解決することを通して信仰を増し加えようと、彼らの信仰を試されたのです。

✠ 不安の原因

恐れは、私たちの中にある不安と、見える出来事が結びついたときに生じます。

人間とは、体でも魂でもなく、意識(精神)です。意識が生じるためには、私たちの中に普遍的な運動があることと、そこになんらかの刺激を受けることが必要です。たとえば、「おなかですく」という運動があって初めて、目の前に食べ物が現れたとき、それが食べ物だと認識されます。もし、「おなかですく」という運動がなければ、食べ物を認識することはありません。私たちの中になんらかの運動があり、そこになんらかの刺激があることで、意識は生まれるのです。

聖書は、人は地のちりによって造られ、そこに神のいのちが吹き込まれたことで生きるものとなったと教えています(創世記2章)。永遠であり自由である神のいのちが吹き込まれているということは、私たちの魂は、初めから永遠と自由を知っているということです。ところが、体が持ち込んでくるこの世の情報には、永遠も自由もありません。私たちの体が持ち

込んでくる情報は「死」と「制約」です。こうして、魂が知っている永遠と自由という運動に、体が持ち込む情報が刺激となって意識が生じます。これが、私たちが存在するということです。「人間とは何か」と哲学者が必死になって見つけた答えが、聖書には初めから書いてあったのです。

人は本来神と同じ無限性でしたが、罪によって死が入り込み、体は有限性になりました。「無限性」と「有限性」、つまり「永遠と自由」と「死と制約」という、相反するものが人間の中には同時に存在します。こうして、人は矛盾の上に存在することになり、そのため、常に不安を抱えています。

不安を解決するには、矛盾を排除するため、どちらか片方に属するしかありません。有限性にシフトすると、動物や植物と同じになり、人間を放棄することになってしまいます。無限性にシフトすると、これは信仰の話です。哲学者であり神学者であるキルケゴールは、これを「飛躍」と呼びました。キルケゴールは、不安を解決するのは、見えるところに支配されるのではなく、永遠であり無限である神の言葉を信じる信仰しかない結論づけています。

✦ 恐れメカニズム

恐れは不安と結びついていることを解明したのが、フロイトという心理学者です。フロイトは、何かを意識するにはその前に必ず潜在意識（無意識）があって、潜在意識の働きかけによって意識が生じることを発見しました。私たちの土台にある不安、これは潜在意識に属するもので、見える実体はなく、人はそれを意識の上で感じていません。

不安の根源である無限性と有限性の矛盾とは、わかりやすく言うと神の愛が見えないということです。私たちの土台には、魂を通して神の愛がありますが、有限性しか認識できなくなった私たちにはこれが確認できないため、不安が生じます。この見えない不安を排除するために、人は潜在意識の中で困難な出来事に不安を重ねて意識化させます。その結果、困難な出来事に会った時、恐れを感じるわけです。

たとえば、人の体には水分が必要です。しかし、人は自分の体の水分がどうなっているのか、意識の上ではわかりません。そこで、体は水分が足りなくなると、のどの渇きを訴えることで意識化させます。しかし、本当に水分を欲しているのはのどではなく体です。私たちが不安を意識するとき、その不安は困難な出来事によって生じたものではなく、困難な出来事によって不安に気づくということです。

創世記 3 章を見ると、アダムとエバが罪を犯して有限性になったとき、自分の体を意識するようになり、いちじくの葉で覆ったとあります。それは、有限性によって神と遮断され、それまで感じ取れていた神の愛を感じるができなくなり、「どうしてこんな体になってしまったのか」と、その不安の原因を体に結びつけ、恐れを感じたからです。それが「恥ずかしい」という感情で、裏を返すと、自分の姿を恐れるようになったということです。二人は、死が入り込むまで「恥ずかしい」と思うことはありませんでした。

なぜ人間は着飾るのか、なぜ自慢するのか、なぜほめられると喜ぶのか、それは自分のことを恥ずかしいと思うからです。誰もが、自分に対する恐れのために、人の目を気にします。

それは、神の愛が認識できない自分の体に対して恐れを覚え、その体をなんとか良くして愛されようとするからです。これを承認欲求といいます。つまり、神の愛が見えない不足分を人の愛で補おうとするのです。

さらに、アダムとエバは、「体は土に帰る」、つまり「死」という問題にぶつかります。こうして、神の愛が見えない不安は、肉体の死という困難にぶつかり、恐怖を感じます。人は、その恐れを排除しようとして、少しでも安全に、少しでも長く生きようとし、そのためにお金を稼ぎ、富を求めます。しかし、これは本当の解決ではありません。

✕ 恐れ为解决

人間は見えない不安を抱えており、その不安は見える実体である困難に結びついて、恐れとなって現れます。このシステムは 20 世紀になってからわかったことですが、神は初めからそのことを知っておられました。

私たちは恐れを抱くと、困難な出来事の解決に努力します。病気や経済的な困難などを解決することで、恐れや不安を取り除こうとしますが、そういう対処療法は何の解決にもなっていないのです。問題は不安です。これが解決されないと、困難な出来事があるたびに、恐れに振り回されます。次から次に問題が起こり、終わりがありません。終わりが無いことに気づくと、人は疲れ果て、人生がどうしてもよくなってしまおうようになります。

問題の本質は恐れや不安の原因は神の愛が見えていないことと、それに気づいていないことです。神は私たちの恐れを根本から解決するためにやって来られました。

「しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」(ヨハネ 6:20)

恐れは罪と直結しています。私たちは、自分たちの姿を恐れるから、人から良く思われようとし、そうすると人と自分を比べるようになります。その結果、嫉妬・怒りが生まれ、最悪の場合、殺人にまで発展します。悪い行いは、すべて承認欲求と結びついています。ですから、恐れ・不安を排除しなければ罪から解放されません。

神は、なぜ私たちが恐れるのか、その原因を知っておられ、またそれを取り除く方法を知っておられます。聖書は次のように教えています。

1. 罪を告白しなさい

神はどんな罪も赦してくださいます。それによって、人は愛されていると知ることができます。イエス様がなされたのは、罪を赦す活動です。そうして、あなたを条件をつけずに愛していると示されたのです。そのことを知ると、心の中に言いようもない平安が訪れるのです。それは霊的な平安です。

2. 復活

イエス様が復活したのは、ご自分の復活を通して、「あなたは死なない」と伝え、私たちの

死の恐怖を取り除くためです。「神は私を愛し、永遠のいのちを下さっている」と知ることで、神の愛が見えないという究極的な不安の原因が取り除かれていくのです。

3. 祈りなさい

困難に対して祈ることで、神が助けてくださることを体験し、そのたびに神に愛されていることを知ります。こうして私たちは、神に愛されていることを霊的に知るようになり、不安の根本が解決されていきます。そうすると、困難が少しずつ別の方向を向くようになります。それまで困難に会うと恐れていたものが、次第に希望に変わるようになります。

だからイエス様は、困難、患難、試練、迫害、人から嫌われるとき、感謝して喜べと言われました。それは、それらのものが恐れを生み出すのではなく、「神がいるから大丈夫だ」という方向に向くようになるからです。神に愛されている自分を知ると、人は変わります。困難に出会った時、「神が助けてくださるから大丈夫」という方向に変わります。これを「安息に至る」と言います。

神は私たちの不安と恐れの原因を知っておられ、なんとかそれを取り除いて、安息を与えたいと願っておられます。神はまず「恐れるな」と呼びかけ、「私がどれだけあなたを愛しているか見せてあげよう」と十字架に架かれたのです。そして、死の恐怖に対する恐れからも解放するために、よみがえってくださったのです。

✠ 平安を与える計画

「それで彼らは、イエスを喜んで舟に迎えた。舟はほどなく目的地の地に着いた。」
(ヨハネ 6:21)

「すべてに時がある」と聖書が教える通り、イエス様はちょうどいい時を選んで来られました。イエス様は4~5キロメートルも沖に出た舟のところまで湖の上を歩いてこられたので、弟子たちはさらに恐れましたが、イエス様の「恐れるな」という言葉を信じ、感謝してイエス様を迎え入れました。すると、波は収まり、彼らは目的地に着きました。

神は、私たちを目的地に連れて行ってくださいます。神が来られたのは、さばくためではなく、私たちの恐れを取り除き、目的地に連れて行くためです。神の計画は、平安を与える計画だからです。

「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。——主の御告げ——それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。」(エレミヤ 29:11)

神は、従わない者をさばいて言うことを聞かせるために来られたのではなく、人間の罪を

癒して平安を与えたいと願っておられるのです。そして、そのために私たちにしてほしいことがあると言われます。

「あなたがたがわたしを呼び求めて歩き、わたしに祈るなら、わたしはあなたがたに聞こう。もし、あなたがたが心を尽くしてわたしを捜し求めるなら、わたしを見つけるだろう。」(エレミヤ 29:12-13)

神を呼び求めるとは、神の御言葉を求めることです。神の言葉を信じるならば、平安が訪れます。困難にぶつかったとき、祈り、御言葉を求めましょう。必ずあなたを励ます御言葉があります。その言葉を信じるなら、体を通して見る出来事は困難であっても、信仰を通して見れば大丈夫だと知り、平安を得るのです。

人は、魂と体という矛盾を抱えています。有限の世界に支配されないためには、信仰で見ることです。解決は信仰にあります。神の言葉を信じましょう。

✠ いのちのパンを食べよ

「その翌日、湖の向こう岸にいた群衆は、そこには小舟が一隻あっただけで、ほかにはなかったこと、また、その舟にイエスは弟子たちといっしょに乗られないで、弟子たちだけが行ったということに気づいた。しかし、主が感謝をささげられてから、人々がパンを食べた場所の近くに、テベリヤから数隻の小舟が来た。群衆は、イエスがそこにおられず、弟子たちもいないことを知ると、自分たちもその小舟に乗り込んで、イエスを捜してカペナウムに来た。」(ヨハネ 6:22-24)

イエス様がいなくなったことに気づいた群衆は、テベリヤから来た小舟に乗って、イエス様を捜しに行きました。神様は群衆にイエス様の元に行くための舟を用意しておられました。今も神様にはあなたの問題を解決する用意があります。その用意を見つけなければなりません。本気になってイエス様のところに行こうと思うなら、必ずその用意はあります。

「そして湖の向こう側でイエスを見つけたとき、彼らはイエスに言った。「先生。いつここにおいでになりましたか。」イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。あなたがたがわたしを捜しているのは、しるしを見たからではなく、パンを食べて満腹したからです。なくなる食物のためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。それこそ、人の子があなたがたに与えるものです。この人の子を父すなわち神が認証されたからです。」すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」(ヨハネ 6:25-29)

湖の向こうからやってきた群衆に、イエス様は「あなたがたは肉の満足のために来た」と言われました。いくら肉の満足を求めても恐れへの解決にはならないことを、イエス様は教えられたのです。不安や恐れの原因は、神の愛が見えないことなのですから、肉の満足ではふたをするだけで、解決にはなりません。趣味や娯楽に走るのは、自分を見る勇気がないからです。「そんな生き方をこれからもするのですか。私を見なさい。」とイエス様は群衆に語っておられるのです。

本当の解決は永遠に至る食物を食べることです。それは、「まことのパン」、イエス・キリストを信じることです。それが問題の解決になります。

「そこで彼らはイエスに言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるために、しるしとして何をしてくださいますか。どのようなことをなさいますか。私たちの父祖たちは荒野でマナを食べました。『彼は彼らに天からパンを与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。」イエスは彼らに言われた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。モーセはあなたがたに天からのパンを与えたのではありません。しかし、わたしの父は、あなたがたに天からまことのパンをお与えになります。というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」

(ヨハネ 6:30-33)

今も昔も、「イエスがキリストだという証拠を見せてくれ。そうしたら信じるから。」と言う人たちがいます。これは間違った態度です。知性や理性で納得して信じるのは信仰ではありません。私たちの理性が把握できるのは、この世界のことだけです。神の国は、理性では到達できないのです。

納得とは、神の上に立つことです。「私は賢いから神を理解し、信じることができた」という態度です。しかし、神を信じるとは、神の前にへりくだることです。「私にはわかりませんが、あなたがそうおっしゃるなら信じます。」という態度です。

神は、あなたの意見を求めたり、あなたのご機嫌をうかがったりする気はありません。ただ「私を信じるのが神のわざだ。私を信じなさい。私がまことのいのちのパンである。」と招いておられます。

モーセが与えたのは肉の満足を与えるパンであり、いのちではありませんでした。イエス・キリストが与えるパンは、いのちを与えます。それは、イエス様ご自身です。

私たちの問題は見えるものしか信じないことです。それでは問題は解決せず、私たちは矛盾を抱え続け、いつまでも不安なままです。自分の敵は、神の言葉が信じられないことだと気づく人は幸いです。十字架の言葉を信じる時、あなたの問題は本質的に解決し、癒されていきます。聖書は、十字架の打ち傷によってあなたは癒される、十字架の言葉は、信じない人には愚かであっても、神の救いにあずかる者には力になると語っています。